

「取り敢えずデユナミスを探しましょうよ」マジヨリアル提案に、「そつだ。そつしよつ」ウィザットも同意したが、直ぐに「あ、ごめん、お嬢さんは足が痛むんだ。たよね、歩けるかい？」と氣遣いを見せる。

「大丈夫よ。ゆつくりなら」ウィザットがマジヨリアルの手を取り、彼に支えられる形で、彼女は歩き出した。照り付ける日差しは容赦はないが、湖面を撫でた風が涼しさを齎してくれることが多少の救いではある。

しかし、お祭りをエンジョイしている群集の中を歩く2人は、次第に恐怖を伴った違和感に襲われつつあった。「見たことがないものが沢山あるわ。人々が持つているあの小さな四角いものは何かしら。指で表面を摩ったり耳に当てたりして…」マジヨリアルがそのまま言った時、彼女の言葉を遮る形で、「あ！デユナミスが居た！ウィザットが叫んだ。そして馬に近寄り、馬繫ぎを解こうとすると、「おい！俺の馬に何の用だ？」激しい竜騎兵姿の若者が声を荒げて近付いてきた。「これは君の馬かい？僕の馬にそっくりなんだが…」ウィザットが答えると、「何を言ってるんだ？これは俺の馬に決まっているだろー」と竜騎兵姿の若者はウィザットを睨み付けた。

「どうかしましたか？」たまたま通り掛ったSECURITYと背中に書かれたシャツを着た若者が声を掛けてきた。

「いつが俺の馬を盗もうとしやがったんだ！」竜騎兵が顎でウィ

ザットのことを示す。「違います。これは僕の馬かと思つて…」なデユナミス。お前はデユナミスだろ？」

ウィザットの問い掛けに、その馬は目を細めて鼻面をウィザットに擦り付けてきた。「ほら、やっぱりデユナミスだよ。ウィザットが言う

と、「何い？お前頭がおかしいのか？」竜騎兵が凄む。「だって僕がデユナミスと他の馬の区別がつかない筈はないんだ。この馬は確かにデユナミスだよ。ウィザット



の主張に、竜騎兵が陽に焼けた顔を更に赤くしながら、「お前ぶざけてんのか！」と怒鳴った。

ウィザット、竜騎兵、SECURITYの周囲には、徐々にこの悶着に對しての野次馬的な人が足を止め始めていた。

と、そこへ一人の老人が近付いてきた。「あー爺さん！一度良いとつて来た！この馬は僕の馬だよね？」ウィザットがその老人に向かつて声を掛ける。

「爺さん？ウシは君に爺さんと呼ばれる筋合いは無いが」老人

はむつとした。

「何言っているんだよ、マグワート爺さんだろ？」ウィザットの問い掛けに、その老人は訝しうな顔で眉間に皺を寄せ、更にウィザットを凝視すると「成る程」と言つて頷いた。

そして、「ま、兎に角、その馬は君の馬ではない。事情はウシから説明するから、取り敢えずここからは立ち去つたほうが良いぞ。あまり揉めていると警察を呼ばれ厄介なことになるぞ。さ、ウシと一緒に来なさい」と言った。

ウィザットは不服そうな顔で、何か言い掛けたものの、その老人の鋭い眼光に屈する形で、その言葉を飲み込んだ。

老人は静かに回れ右をすると歩き始めたので、ウィザットは少し離れたところに居たマジヨリアルの手を取り、老人の後に続いた。SECURITYは肩を竦めて立ち去り、竜騎兵も解せない顔で首を振りながら馬から離れた。馬だけが哀しそうな瞳でウィザットの後ろ姿をいつまでも追っていた。

「なあ、爺さん、どういふことなんだい？」ウィザットは前を歩く老人の背中に問い掛ける、と同時に、「何だあれは！」と絶叫した。バタバタという音と共に、快晴の空に太陽光を著しく反射させる物体がいきなり飛行してきたからた。ウィザットとマジヨリアル背筋には戦慄が走り、恐怖で思考回路はフリーズ。その場で凍り付き動けなくなりました。

つづく

チャネリング相談

Q 医者から余命を告げられました。残された時間、私は何をしたら良いのでしょうか。また、人は死んだらどうなるのでしょうか。(LA 在住 Hさん)

A それはとてもシビアな状況ですね。心中お察し致します。私の回答で少しでもお心が明るくなれば幸いです。奇跡が起きてご病気が完治されるということも十分にありますが、残された時間の過ごし方について述べますと、一言で言えばやはり「感謝と許し」です。今迄出逢った人、起きた事柄全て。それらは経験としてあなたの魂の成長の糧となってくれました。良い経験も、そしてたとえ酷いと思える経験も、全て宇宙と共にご自分の魂が決めてきたあなたの人生プランの中にあつた扉を開けた結果です。開けなかった扉もありますが、開けた扉により経験したことは、全てあなたの魂を輝かせました。

そして、あなたにとっての酷い経験を出来る限り許すのです。許しは愛の一端でもあります。どうしても許せない人も居ると思いますが、あなたに酷いことをした人はあなたの人生で悪役をしてくれた貴重な存在です。お互いの成長の為に必要なキャストだったのだと理解して下さい。(だから酷いことをしても良いという理論にはなりません)

そして、「死」は長い魂のジャーニーの中で一つの通過点であり、次のステップに行く為の地球からの卒業式です。この地に残していく人達とは暫しの別れとなりますが、魂の村で再び一つのエネルギー体として一緒になれる時が来ますし、そして再びこの地球か他の星で学びの道を歩む同志となる日が来ます。魂のジャーニーは永遠に続くのです。

残された日々を悔いの無いものとし、旅立たれるその瞬間、沢山の感謝と愛に満ちていることをお祈り申し上げます。